



作に嫁ぎました。英作は絵に描いたような働き者で正直者で、だから身上がたまるかといえ、あまりの優しさに、困っている家を見ると自分も大変なのに作った作物をあげたり、作物の代金をずるい商人にだまされて、ぼう引きされたりしました。だから、いつまでも貧乏ではありません。でも姉はそんな英作を心からしたっていました。だからいくら貧しくても愚痴の一つも言ったことはありませんでした。妹は

「毎日きれいな衣装を着て、毎日おいしいものを食べ、大きな大きな御殿のような家に住みたい。」  
と言って、何人もの大金持ちからの縁談を断っていました。しかし、姉の嫁いだ村のもう一つ先のとなり村に、この辺一帯の肝煎がいて、その息子の金造が妹を気に入ってやって来ました。金造が、  
「いい衣装、いい食べ物、でかい御殿にすまわせるぞ。」



と言うと、妹はすぐに嫁いだのです。

熊谷の家はほどほどの大百姓のためでしょうか、身上のない者、身分の低い者を見下げてそまつにあつかうことが多いようでした。

ある正月に姉のむこ英作が年始のあいさつに来ました。熊谷の家主は「ありや。身の程知らずが。正月のあいさつだとは気のきいたことを考えたものだ。酒でも飲ませてもらおうとの魂胆だろうさ。」

と年寄りの雇い人に命じて、勝手口の土間でどんぶりいっぱいのおたくわんをおかずに安酒をたらふく飲ませました。

英作は「ちそうさまを言って姉の実家を出ました。その帰り道に妹夫婦に出くわしました。英作は

「ああ、あんだの実家でもすごい。ちそうになりました。とにかく家の長老様がお出ましになって、広い広い場所で、珍しいおかず、酒もたらふく飲ませられまして、本当に正月から大変立派な接待でござります。あんだらは金持ちだから、きつとわだす以上に接待されましよう。」  
と酒で気持ちよくなって言いました。妹は



「あたりまえだわさ。何といつてもわたしの旦那様はこの辺一帯の大肝煎の息子。おまえみだいな貧乏人の接待などは比べものにならない接待のちそうだろう。」

や。」

と…口には出さないものの、顔にはすっかり表して、英作を一瞥しました。

妹が実家に着くと、父の勝衛門は婿の金造に頭をへこ下げながら奥座敷に娘夫婦を通して座らせました。光輝く朱塗りの漆盃に、これまた朱塗りの提子（ひさげ）で、とっておきの銘酒をそろりそろりといだのです。おかずと見れば鮑熨斗（あわびのし）という蝦夷鮑の珍味と、唐墨という長崎渡来の緋の珍味が、高価な九谷焼の小さな皿に盛りつけてありました。奥の部屋は匂い立つ新畳の六畳ほどの総檜造りです。仙台藩の有名な宮大工に、わざわざこの正月に向けて造作させたものでした。けれども、妹は部屋を見回し、盃の酒と皿の珍味の量を見て、どなりだしました。

「父様、何ですか。この辺で一番の肝煎に嫁いだ娘と亭主を、こんな接待で迎えていいものですか。」

と。父親は

「何ば言うんだ。おまえ様が嫁いで初めて正月に来るといっか

ら、宮大工に奥座敷を作らせ、酒も肴も吟味したのに。この親不幸者めが。」と怒りで顔を真っ赤にして言いました。すると娘は

「何さ。こんなものは肝煎様の家では当たり前。来る途中で姉様の婿と会ったから聞



いたけど、あんな貧乏婿に、広い広い場所で、長者様までおいでになって、大酒を用意して、大変なごちそうをしたんですってね。」

と悔し泣きしながら言いました。そして、せっかくの接待には手もつけず、そそくさと帰って行ってしまいました。父の勝衛門は開いた口がふさがりませんでした。でもね。勝衛門はここで正気に返りました。少しくらい自分に金があるからといって、貧乏人を見下げて接待したばかりに、こんなことになってしまったのだ。どちらも自分にとっては同じ、かわいい娘たちの婿なのに。差別してしまったことを深く恥じました。

それ以来熊谷の家では、どんなに身分の高い者にも、どんなに貧しい者にも、どんなに愚かな者にも、どんなにみすぼらしい者にも、同じく心を込めて世話をすることを家訓としました。ある時はそのために大損をしたこともありましたが。でも最後には、熊谷家は大いに尊敬され、岩月村で一番に栄えたということです。